

合わせて、3月下旬は医学書が多く発行されてきた。この4月には、筆者が編集した書籍が2冊刊行されたので紹介したい。

1冊目は「生活習慣コーディネート術」である(図3)。現代の病気は、生活習慣に関わることが多い。

いかに食事や運動をコントロールするのかが重要だ。

医師の指導だけでは限界がある。そこで、栄養士や運動療法士、薬剤師、看護師などによるチーム医療がこれから推奨されている。

そこで、コメディカルとともに進める指導のコツをまとめた。以前は、食事、運動、薬という順序で教育がなされていた。しかし、現代は、1が運動、2が食事という順番だ。豊かで便利過ぎる日本で住んでいる



図3



我々は、意識して動かなければ、どうしても運動不足病とに陥ってしまう。

2冊目は、日本プライマリ・ケア学会の広報委員長としてまとめたものである(図4)。タイトルは「熟練医から、日常生活のさまざまなコツを伝授」というものだ。先輩医師から後輩の研修医に対して、臨床現場で役に立つヒントを教えるという設定となっている。

この2つの書籍には共通点がみられる。大切なポイントは、「どのように生活习惯をうまく管理するか」である。

ところで、「生活

習慣病」という言葉は、どのように生まれたのかを「存じだ

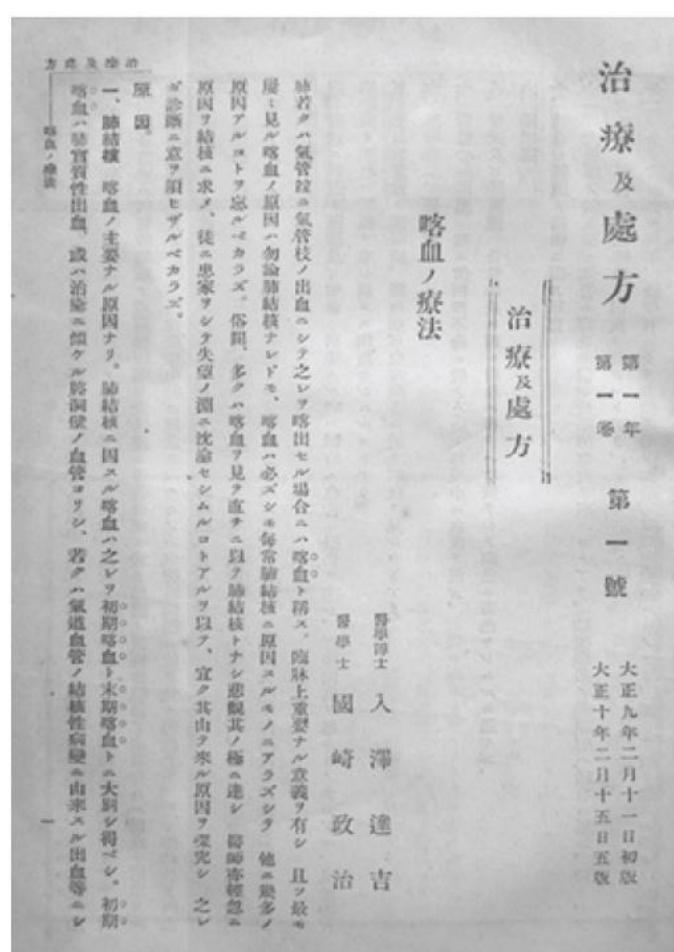


図5

ろうか? 実は、1970年代後半に日野原先生が提唱された言葉である。時代の流れを察知し、いち早く新しい病名を提唱された。その結果、1990年代半ばになってようやく、從来使われていた成人病から生活習慣病へと、厚生省が呼称を変更したのであった。

医学者は、人類の敵である結核を、長年研究し続けてきた。ちょうど学会出張の際、関連する編集会議に参加したときのこと。現在が大切に保存してきた歴史的医学書を目の前で拝見させて頂いた。1920年(大正9年)2月に出版された医学雑誌「治療及処方」(南山堂)である。

現代の国民病は、生活習慣病および糖尿病である。一方、歴史を振り返ると、20世紀前半の国民病は別

医療の歴史を感じる

今回、医学会に参加した際、約90年前の医学書に出会った。その記述から、当時の医療状況や医学者の情熱が伝わってきた。

毎年春には、桜の花とともに新しい年度が始まる。

未来の展開に期待しながら、古の医学史にも思いを馳せ、先人の業績を認識し、感謝したい。

「温故知新」。出典は論語であり、原文は「子曰溫故而知新可以為師矣」である。私たちは過去の学説を

学び、現状を深く知り、今後に活かし、進む道を探っていくたいものである。

(板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト)

その中から、第1年第1卷第1号の第1頁を図5に示した。その内容をみると、国民病の結核に対する最新の治療法および処方がまとめられている。当時の記述が、漢字とカタカナの混在によるのは興味深い。